



手折茶四

筑前登竈門山

竈門峰頂古神宮
杖登攀望不窮
堪憶千巖花發
日香風吹滿彩霞中

あゝのれ残る小舎
乃木や竈門山

小倉城まゝの道
冬をまゝあへ

雲水のくらくく
急ぐ冬をまゝあへ

訪石先生有詩見示奉酬

夏日遊東光寺大愚和尚見惠佳篇依韻呈謝

薰風終日拂波未祇樹高亭一望開晴景画成三漢海不知前嶺夕陽催

高麗心一月一涼一思鬼亭

立秋遊國寺栗山氏春水亭彈琴

梧桐疎尚度一葉報新秋閑坐彈琴處鳳聲何必求何鳥梧桐一色色秋之ぬ

同秋遊明倫館恭賦短絶奉獻聖壇

猗蘭標奏罷景仰亦何言山水無今古泮宮子載存
弓ぬ乃此系さるる多し由我若菜の丸

初冬の比長府ふゆりぬ

君侯より梨士の服さる鶴鬣水衣さる物をむらさ
ゆるを南州乃諸先生より吹聴せらむと思ひ
且も大宰府天香山神の法より不神物
とんと傳へし思ひ之杖筆さるあつす

往々来ふり鶴より砂より雪あり

翅打てけ菜ふらや夕雪乃雪

詠漁鼓

漁鼓鼙々雪裡分時々款乃帶風聞遙知乘興打多
曲日落西江一片雲

打漁々漢鼓の音さし玉を敷

擬杜牧之寄隱者作奉幻龔榮公

紫陽行路白漫々拂雪梅林袂更寒此興人間誰得
識推門重作一枝看

あゝる波るまゝハ切らぬ意のり

幻龔禪師讀余鶴鼙求衣歌有詩見贈次高

韻奉酬

府君賜我鼓琴衣鶴鼙繁然含雪輝桑梓歡心堪拜
舞蓬萊迎興欲翻飛歲寒松塢盟無恙月白蘆洲夢
可依獨有隨身流水在賞音方外似師稀

已見唱和集

流水系所藏琴名

歲暮宿筵栗群鳥氏宅

逆旅此為滯傍山自待春溪聲聞不盡兀坐一閑人
寫る家や金出の山は如くあろし

丙寅甲春

雲水の自在をり風北柳うれ

余在伏水恭奉和 君侯之玉韻

昨在長門侍綺筵金鞍忽到休川前桃林雲暖三竿

日梅谷風輕千樹烟帝里韶光迎彩筆江家古曲入

氷絃別來還思雙親老欲向故園花下眠

初夏のはほひ 翰林菅君より具

奉里詩仙堂不語く彼名琴を一曲をいそと

歌いおりのり

老より初夏をいそとる小河の波は

仙堂より玉り詩信あるをむ

清佳作うましく編りくむ難おるをむ

又或日山登り陪遊

點々欺星遠飛之映水新山端初霽夕螢火却招人

あちちかゝ人を集るるをなうか

五月二日 雲水の歌多し陪遊をむ 輝の小河

小葉を強き南風の曲をつらうやほをいそとる

横笛を吹く里よりあゝ吹合をいそとる

あゝあゝぬ風や紅より草をいそとる

四糸河原の夕景

柳様も暮りけり 暮らけり 暮らけり
床机うす 淵ぬき 暮らけり 涼うす

伊勢 暮りけり 夕景 近江 路へり 暮らけり
先く ぬきけり 暮らけり 難波 江の あり
かまき 暮りけり 暮らけり 暮らけり 暮らけり
古川の 暮らけり 暮らけり 暮らけり 暮らけり
待人 乃りけり 暮らけり 暮らけり 暮らけり

中く 暮りけり 暮らけり 暮らけり 暮らけり

油庵

暮らけり 暮らけり 暮らけり 暮らけり 暮らけり
うちく 暮らけり 暮らけり 暮らけり 暮らけり
却て 暮らけり 暮らけり 暮らけり 暮らけり
暮らけり 暮らけり 暮らけり 暮らけり 暮らけり
暮らけり 暮らけり 暮らけり 暮らけり 暮らけり
浪舞の 暮らけり 暮らけり 暮らけり 暮らけり
暮らけり 暮らけり 暮らけり 暮らけり 暮らけり

舟の多し、蚊も拂ふべし、これらへ

文化丁卯のとう、古運の古をむすはるふ

色なきこころ、龍王山へ梵唄の音のきき

や、き初命を伴祝し、

螺乃青く、吹起さるり、母のま

父母と、や、は、こ、れ、初、か、ま

春興

山は、去年ハ、筑紫の、ま、出川

初夏のは、ほ、ひ、祖、苗、福、師、藤、山、隸、籍、

や、ら、ま、ま、あ、い、と、や、首、途、を、素、ん、と、思、ふ、

貧、家、一、物、あ、い、と、を、こ、ろ、り、言、を、以、て、と、い、は、

言、ふ、終、や、い、と、意、を、は、さ、す、付、幸、ひ、所、

臨、み、流、る、再、我、折、り、く、れ、と、い、ふ、

志、を、束、る、あ、い、

海、へ、山、へ、玉、か、け、鳴、き、こ、る、る、風

光、り、す、終、風、あ、い、と、ま、あ、り、旭、山

立秋

去年、と、ら、ま、初、雲、の、暮、い、を、や、め、父、母、か、こ、

送る起砂々被致と例の恙おろく
中よりれ供給のありやも只いふはむ
るを思ふのみ

何をうたよ老きやめん今朝の秋

父思病中七夕夕

せぬくつに薬六あふりて乃河

七月十一日父思本庄軒寂

人命如朝露隨風落眼前可憐槿花滴滴歸黃泉
ちりりしんら今を限の物教り

本庄朝よはう桔くめくおらし

菖蒲花を

雲後屋をくくそよおくを若き由

使ひくらの秋をくくお雨のそよ

或年田耕村姑の寺も至り 高祖聖人

清浄戒の法會を設く

仰まむふ影や空申れ月くらう

白石山專修寺小法有感詩作 畧ス

松柏乃影をく白し山峯の月

古くはこれの標之なる津乃と

今年此冬に赤馬宮入り寓居を求免冥妙の

宮を設けたやと思ひ寄しや茶を請言

葉を書き得免都のころこ字法乃里ある

通之屋よりか贈りし給ふり

恵くはらぬ白おきうよく茶する凡

程よく茶をいよく諸君よりあの日又り

は十月朔日とて御う既入の茶念をよて

口切の清茶系くせむとありお好者達と

お少とるま唐の大和の風粧くく終し

人々訪らるるをくまらりし席ハ住吉北南

阿弥陀寺のお終とあり山をけりてむく

松のまるとあまの葉のいそ時ある宮を

とてま宮を免紙くあはり

つ涼くはる保保ん志をれ月

入茶

山麗青石際茗馥白雪廬硯海涵空青照来塵惠虚

用爐日

一の字二の字お崎八幡の神司達をもち
おあけしりハ神乐柳子乃香合ふ神路
山の茶抄を用ひあまは

炉竈やそれ岩すハあまは

芭蕉忌みあ長二府の権友救多出合し
く附合美又各証をさくく茶合中事越の
流浪子扱り玉りし金玉書画類不残
とらまのさき物りかくく千栄のさき
空月庵よ奉納し作りぬ

茶炉の目くらま怒り此合ふらる人くらま
これも亦又あき物よめて用ひ多つた物
略し干満の茶碗を今箱の簾おくり取
茶くく四つ五つとあるら此茶碗の茶情を
もの必滅を情なき者も又滅まとも思ふ
了天性は茶碗大箱の情もあまは
果報抄手一紙くつあまは

破くくくあ鳴呼情むハ落氷

赤筥竹崎橋本氏の許くあ時くゆきくひて

三人のむかしとる玉にや婦女子とも茶碗の因
初とてういあくる事

又新地なる佳馨寄柳の夫婦如くとも
雅情浅く寸おかしくいさくい茶碗の序を
も訪はる者儘のありて無事見ればあくる
志はる事

留別空月共昇

三旬如一夢忽尔下雲扉梅花兼雪月曳袂共飛番止
あくる清しはふ又神の降り連

出昇

幸いなりかき玉
あはれい作五男名

笑ひかゝる世の福あはれや冬も梅

こねとる玉年を越し春秋うけての福得むを
あくる事

世ふり玉限りはくは雲水の舟おも
中人あくる輪くはくは留る玉しり又とる
歩行神の誘ひ入りあうと千里の橋不糧
を包ち守三更月下宿我空舟に舞
とる途はゆぬ

雲をよみ春ははれ 故人葉乃山路

留別

負^テ笈^ニ行千里 山山秋色新^{ナリ} 故郷黄菊夕咲^キ 立^ッ一閑人
のちり後れ晴あそく^ル 後乃月

初冬の比月山といふ^ニ 登り境目不芭蕉
塚ありを^ニ 宿^ル 父母の志^ニ 子^ニ 志^ス 一^ニ 終^ル 子^ニ ぬ
病^ヲ乃高吟あり 予も古^ク 乃^ニ 母^ニ 在^リ 哉
頻^リ 乃^ニ あり^シ 乃^ニ

山鳥の不ろく 又ふ志む 小春^ノ 乃^ニ

月山眺望

渴望^シ 幾^ク 多^ク 歳^ニ 初^ニ 登^ル 豊浦山 眼前十餘國 指^シ 點^ス 白雲^ノ 間
程^ノ あり 萩^ノ 城^ノ あり 玉^ノ あり 先^ニ 河^ノ 添^ル の 沸^ク 釜^ノ あり
と 湯^ノ 傍^ニ あり 湯^ノ あり 湯^ノ あり 湯^ノ あり 湯^ノ あり 湯^ノ あり
の^ニ 湯^ノ あり 湯^ノ あり 湯^ノ あり 湯^ノ あり 湯^ノ あり
も^ニ つ^ク の 湯^ノ あり 湯^ノ あり 湯^ノ あり 湯^ノ あり 湯^ノ あり
歳^ノ 暮^ニ 敏^ク 系^ル 澤^ノ 雅^ク 士^ノ の 墓^ノ あり 園^ノ あり や^ノ あり あり
あ^ニ 後^ニ あり 洋^ノ あり 乃^ニ 年^ノ の 波

庚午 試毫

むすひのこころに母先り世し思ふ初

今日病とるを起りて

何れか杯の踏さるるを一も茶茶畑

生年不満百常懐千歳憂といふ事

に言ふ引く常不千歳のふとを

いふは其の行ひを存ひを業とて

存心とるもさるるも世と云ふ

の存心存心は又存心といふ

あまの思ふに存心は存心の子

かゝる指をおろさるるも

福と大く耳順了とて自ら

参賀のふとを初の一白り

吹聴し作りぬ幸此年は一冊ハ都花

小換むと思ふ待た連俳茶書画の諸

君子希く光毫を揮くこと金玉を

かじりぬ杯杯と餞別離杯の送

とも此賀のふと傳ひてんおれは

は席に臨めたる夜毎懐ふ故に二三物を

携へてきて昔よりあつたそと久しき糸くさむきや
素よりしむ石の堅めおらぬハ善い五斤の
強もむるをより直ふるもより又一節はと
好ひ入り一節を附ゆるをりし

十うるりれ蒼とんそらや松乃花

○一室弁主の三かきや
強ひけりめゆるりて

冪よわけるハお代の色や玉椿

兼
舒園吹

○長き前又五よりそらあは
あつりし畧

細似合ふ素より根かや雉哉久

八十公羽
竹園共舎

若くはや千葉のつひききり

淇澳

強ひてあつた松乃や一むね

女
壽鳥

ちり宿よりお代乃影ひや松のむ

菖蒲菴

ひらぬ細をたのきもはつりや

聴雨

老ゆぬおや花のりしりひも

尼
素信

細の質や根のききりてはきり根

慕香

あせや強ん強ふりしひの細根ひ

女
露秋

蝶も舞ふ少く素く紐乃末長し

花香

そらあつた山人のきりしりも

里曉

去ふ馬と誰か油乃花梅の時

あきとらまふ秋の粒より雪お多ふとら

初冬より正月まで自派亭といふを飯の

茶筵不字解の客を呼ぶくはくは清徳を

汲例の粒集をけふ八は秋八膳又

護國山十二景何きも詩譜の画歌あり

文化幸未試毫富士山を昼くく前矢

詩を略

十の巻に花松を結りや花の表

春興

逍遥館風竹園由ゆくくは粒也乃

中より目出度年をこすも通結りく初春

八節分お真くく

懐くふ福の袋を居やあかしく舟

あきとらゆくくくくあ金持書

自うく松以風も和くくく

逍遥館

女風竹園

歌仙下畧

新年作琴歌私擬南風

春風之生兮可以縱雲遊之情兮春風之時兮可以

阜雲遊之詩

くく 秋意多しゆく 時や花のそ

け一曲多 茶を焚く 明倫館、やうして 聖祠乃
壇下よ奏し ありあり あり ありと 即席 儒学の
法君子 二重 報の なる なる 青糸を 僅かに あり
くちあ あり なる なる なる なる なる なる

奉留別諸君

身老風雲此過客 亦一行も定めず
ゆるも期や暮 此地居秋年をこゑも
舊友六遊の雅情 ありあり なる なる

ありし 志ふ みる なる なる 花は みる 也
なる なる なる なる なる なる なる なる
翁さんと 茶を 抱く 翁翁の みる なる 徳
君子 あり 告げ なる なる

翻 王维陽關曲

渭城朝雨別離春 客舎年々 柳色新 何須更盡一杯
酒 南北東西有故人

ゆる なる なる なる なる なる なる なる

○ 昔より 風文の 周りを なる なる なる なる なる
ぬ 去年の なる なる なる なる なる なる なる なる

○長久新文
の略

健ふさつと見送る喜ぶれ

吉部

女
遊

厚狭孫を枝村氏を初く訪ふふ家子
妻は流海と不鋸酒をとりてあきれて

敵初時やそあれ海志の

海峯

らまの郷の歸りハ母やう人れ中
よまを路と望しん為うハ有あす

壽解を去る免負 経 奥 伝

翻 年八十の若り 恩乃裡

此とあすそ途

○帰はあつと 戸もさう 建り 控えあふから
あるつらあそまのそ途を 経 送り伝らと

負ぬ糸うさや 扇の初事あも 周古

○奉送 女兄菊舎遊 洛情見于詩 莊心直

帝室相花十分春馬蹄今去寄吟身心事可憐彩籠
鳥囀 帯恨送遊人

三田尻の蔭舎をゆく訪ひぬの園
あきつゝさうさう

ちつとかたや一老松も今や世の時

細く囀月橋おちてあされ服前うきり

あきとあきつゝ奥へく

先山別原晴や菜穂の花乃を

春あ亭あうり連つれお舎へ贈答附々

あきつゝあきつゝあきつゝあきつゝ

○あきつゝあきつゝあきつゝあきつゝ

あきつゝあきつゝあきつゝあきつゝ
あきつゝあきつゝあきつゝあきつゝ

日之田尻の蔭へあきつゝ

あきつゝあきつゝあきつゝあきつゝ

あきつゝあきつゝあきつゝあきつゝ

あきつゝあきつゝあきつゝあきつゝ

あきつゝあきつゝあきつゝあきつゝ

あきつゝあきつゝあきつゝあきつゝ

あきつゝあきつゝあきつゝあきつゝ

あきつゝあきつゝあきつゝあきつゝ

けしきと宮船みやふね 若よいあをらりま 二 若 若 若

日五日の浦より船出し舟りぬ

安藝の國巖鳴りし舟

若船人七浦よりいづき

明石の沖より遠く人好む船と舟

七舟りし

三島の雲を人好む船と舟

浮生十三日大船より舟りし舟

舟りし本願の法寺より舟りし舟

法法會をあらき舟りし舟

宗風之隆可い満雲天之中宗風之昌可い比

山櫻之芳可い

かき舟時や一天四海花乃雲

舟りし舟月十日舟りし舟

舟りし舟若よ浪舟りし舟

○前書
五略

松の葉も赤涼も舟りし舟 舟 舟

夏舟りし舟りし舟の舟

舟中下... 下界... あり

其の... 交秋浪華子... 年のむりし... 許す... 老楽あり... 此の... 也

蚊帳の妻の重何の盆の月

或日馬場氏の別荘... 女ある... ありはあり... あり

蜀の... 秋の錦糸

○... あり... あり... あり

... 稀人の... あり

... あり

詠ふくく十そあひ余り信りぬちみ娘京
りねもさるい海しん

秋色園林一州堂紗窓把酒月華涼豈圖醉後君兼
我俱詠國風清興長

○韻を和

思ふとちあふぬ免てく月世の

こふふさふらふ秋乃秋長き 常子

或日住者くし詠えあふぬ秋をく

めて真しん

娘形や月少神さるるお影

浪善く良秋の月を常しん

帆下影何さまらふの月

再上京

三毛目の月の浪善よ遊舎しちち待月を

淀く舟く足信し今や月の洛の橋亭ふ

宿り暫く今の香りいそあハーうま

あそ真しん

軒も別居すふ都乃居待月

樂只管公とまゝ家松手画歳久し
法賢あし玉なりあも賜あめりきハ
あもせ綿や重き哉く雲の上

重詣 黄門琴仙公閣下恭賦奉呈

雲遊万里意悠々獨抱孤琴入 帝州為是南董傳

不絶教人其下仰風流

或日大徳寺中黄梅院より待山林の
秋色を感ふ

あつとくこぞ紅葉の中此紅葉亦

九日 なまけけ信節よりなまけけ
そむりよりなまけけ

かす秋程ふまやれすふりふの葉

鴨濱 台庭の菊花を御観奉りて

歳久色く仰くも高き甲斐の乳

おしも雨少りは水

静さや七百と路の雨乃歳久

雲林院多し北葉花をこん信りて

白雪より雪をは葉の山路りか

催茶

一梅一の縁、隠し被衲、弊鞋、よびを
 空、免守、風冠、雪月、楽、くぬ、る、途、し、今、驚、ひ
 身、順、り、直、つ、き、ぬ、水、の、自、り、つ、程、ひ、と、さ、る
 心、と、想、と、く、由、し、と、親、く、交、り、事、成
 徳、君、子、り、一、碗、の、清、茶、を、系、り、て、信、徳、の、珠、を
 請、ま、り、ら、む、と、思、ひ、信、水、く、年、比、雲、み、り、
 又、を、ま、ら、せ、く、さ、る、道、も、何、く、さ、れ、ハ、其、の
 お、く、こ、も、不、く、り、の、し、と、取、隠、り、入、り、は
 茶、筈、り、例、の、際、を、持、り、く、む、と、系、り、を、
 時、を、告、る、り、あ、の、一、曲、を、し、り、し、り、
 お、り、い、と、る、ま、傳、る、の、こ

倣李青蓮吳歌調

乾坤一蓬客、万里此身輕、彈琴耽逸興、烹茗會詩盟、

要識閑中味、請聞微上聲

去、く、金、く、も、む、少、ま、此、雲、よ、茶、の、む、ま
 口、切、や、四、海、其、味、を、取、陀、印、し、ん

辛未十月朔詣大德寺空華室設茶讌奉請
 亞相源公及社中諸彦率賦唐律以呈

空華元有主容膝即吾廬問訊清賢在往來塵俗疎
為開畫與茗且弄琴時書此裡出情足莫嫌供給虛
くま初る物より方福のふら那

樂只管公書堂設茶燕奉迎二三標紳賦以

呈上

夜來寒雨靜鼎裡起松風更引簷櫻客洋峨興不空

は鳳をまかり奉り茶燕の樂なるを人の生多因一方るを
故を書くはあやむしは終る

ら終るはゆらゆら温古のあはれを茶に忘る

樂只書堂重奉謁權貴諸公

撫琴清嘯興方奇颯松風入樹時滿席高冠都屏
宋陽春一曲拜新詩

雲のうらやまを思ふ多き梅

奉謝 黃門琴仙公賜早興寫茶也

黃門佳色遭冬至茗已新呼鶯鳥名裏裡收來千載
物一年却再對山櫻

屏く姿の好小學をれ初まる那

奉呈 赤城藤公擬長相思調

乳中規樂中規盈耳洋々知是誰教坊君所司幾刪

詩幾獻詩想見雖多雲泥離陽春和素稀

雲高——山乃下極了がふら

表月末の比わい 亞相源公紫弁一の

清別是人めさきしてこ——少公初

清茶をま——おろく くらみ初る初

大ぬくのわぬと取あふまつる清はし

らふらと清茶室よりめさき瓶子さく

あふ花より自り

満るまやと風のまやとまの梅

立春後一日過松梅院喫茶賦以謝

吟行郊野北梅樹報春香更喜神仙窟清茶滌濁腸

釜の煮火や手此まある松の雨

歳抄陪 樂只管公遊詩仙堂

追陪忘歳處林樹趣峩々昔聞古琴在今看新賦多

靈花埋徑白梅信放香暗吟望報無物其如勝地何

遊不月尚も先解る定ん哉

謝惠白梅

此種自庚嶺花開長壽梅凌寒千載外餘都入詩材

大如く此香く在待人長壽梅

歳暮宿西徳寺

けま刺きサと所解り
 四つ五つをかりの昔
 又波近江路終くや
 一は月い宿依り
 初し値偶の縁り
 流く風境の周く
 今も
 今も吾身乃終り
 とさくんをけ玉ん
 ちとやかく伝き
 雲水の身れ
 しくし
 あく結るよや
 かのやと
 傳る 思ふ

花の根り物る ちや年乃より

文化壬申の案被

くもやちや歩都此不二の初や

初春彈琴

墻柳懸春色庭梅開
 惠風物華雖改換身
 是古禁中
 去々色初や山
 ありまあり

春日偶成

俳侗鴨水邊風暖緑揚柳似
 繫系羈人心年々為客久
 繁るく若く錦乃以や柳

春雪呈高巖禪師

春雪仙園滿猶疑花樹新
雲相應揮筆不賦幾騷人
表_ハま_ハる_ハ衣_ハ向_リく_ハや_ハ不_ハ鳥_ハの_ハ臨

奉謝 黃門琴仙公賜雷氏様琴

瑞氣彩雲裡新承雷様琴
重恩憐舊識陪宴奉幽心
雲邊陽春曲風決大雅音
由未添壽色多謝寵波深
樂只管公堂前様花をかしく

あふささる_ハ体_ハり_ハて

ゆる_ハ不_ハく_ハ高_ハ支_ハ雲_ハ井_ハ乃_ハ様_ハ可_ハ非

嵯峨看花

渡月橋邊好山櫻映水
閑卷香帶風動人影入波回
雲_ハふ_ハく_ハあ_ハま_ハと_ハま_ハる_ハ山_ハの_ハま_ハく_ハら_ハい_ハら_ハぬ

愛_ハり_ハ竹_ハ中_ハ國_ハ手_ハり_ハま_ハる_ハり_ハく_ハま_ハる_ハ病_ハある_ハを

診_ハ茶_ハ一_ハむ_ハく_ハそ_ハて_ハ幸_ハ茶_ハの_ハ初_ハ夏_ハ此_ハ以

少_ハま_ハと_ハく_ハと_ハ通_ハひ_ハ初_ハり_ハま_ハる_ハく_ハま_ハる_ハく_ハ云

不_ハ白_ハを_ハ持_ハり_ハま_ハる_ハく_ハそ_ハて_ハ後_ハ長_ハく_ハ湯_ハ茶_ハを

の_ハあ_ハま_ハり_ハ部_ハり_ハ終_ハ又_ハ訪_ハく_ハ不_ハ交_ハ毎_ハり

茶_ハ室_ハ不_ハ一_ハ碗_ハの_ハ法_ハ條_ハを_ハま_ハく_ハま_ハる_ハく_ハ云

月や花の雅情重なりけり庭前の
さくらをもちもいひらるる花

木の枝や通ついつけて花乃雪

○葉をぬ浪華やまき下り
こころをささぐ

あふこころを招くゆきかもしの笠

以知

彌生九日まき府 春後あり

さき路まふ例よりとりて依丸の清籠籠へ

伺候し奉りて

あふ時や花の柳山幾ゆるり

三月十日はくくあく浪華へ舟上りして

谷氏まきまきしお中まきまき

けさの

春あやさくもふるを忘る

其ころまきあつ馬場氏の許を訪く

黄門琴仙公よりやうをうけつて浪華

の弟子ぬり古染の弾法を傳へたり

あふ金傳不替や松も花の時

深きまきなりまき乃糸冠

栄子

○又發ありて都の正をそとて
つゆとつゆとつゆとつゆと

影あふく松なりあき曙の色はて

りふこののきふきと初め
全

○ちとちとちとちとちと
ありーーとつゆと

葉の緒れ末もつゆとつゆと

あつら乃水悲清をちとつゆと
全

あつら乃佳の江乃岸根追て今と

いふふと新と歌仙堂と禁を

ふふとあつらを窓と空と訪て

あつらとつゆとつゆとつゆと
あつらとつゆとつゆとつゆと

あつらとつゆとつゆと

契りつゆとつゆとつゆと

又

あつらとつゆとつゆとつゆと

あつらとつゆとつゆとつゆと

○あつらとつゆとつゆとつゆと
あつらとつゆとつゆとつゆと

時々宮居乃森れ夏木と

言葉の花影植添とつゆと

夕端の句 美法の舊交いありきありき
夕乃てりみんるるをさるるありき

移る影了小奥に物小柳 美濃雪香園
卓路

○長門菊舎道人書自浪華
到賦此却寄

伊勢 吟松富徳章

睽違十八更 衰葛夢寐悠 思不窮蒼海青山千里

隔白雲明月一天同 探花每恨顔難見 因鴈忽忻書

始通從來渴望懸福久 迂途幸許御薫風

即時和韻のあら

字く多や芽也をさるる小葉言風

昔より芽也ふの花をさるる後十年常小

懐雪ふと幸は佳作をさるる集冊子に記付る

幾浪華

西徳寺の義成律師也 此世之翁と云漢の也

法隆寺開扉小訪 必と立出侍りて小智

日影也

灌佛と云く 此之ぬ玉津と云

十三峠 中

とらふと浅草十と峠 おとらふと

程より法隆寺へ参りぬ。爰より上田へ某堂
 といふ古西徳寺にゆかりあり。予は之を
 相志し人なりとて。いふ間。旅より詣来りて
 くる。いふ。た。勝事。小。逢。侍。り。し。れ
 上田ぬ。乃。誘。掖。を。し。く。り。し。か。厚。情。更。々
 といふ。ぬ。り。ぬ。乃。地。名。を。之。に。和。さ。り。や
 是より真一と名付。末より。因。り。て。せ。ぬ。事
 を。思。ひ。お。存。す。べ。し。

並松の落葉か。く。お。く。心。を。訪。初。め。り。

此法隆寺の。こ。こ。を。お。ぼ。う。つ。及。つ。つ。間。庭
 あり。く。寶。篋。の。什。器。等。を。く。出。さ。れ。貴。賤
 相。つ。と。い。お。観。を。例。あ。り。予。り。し。無。く
 開。元。聖。徳。寺。を。た。れ。る。事。を。聞。信。し。申。拜
 見。せ。し。や。と。思。ふ。わ。り。い。は。れ。其。事。の。吹
 徳。あり。し。予。に。其。琴。を。一。弾。さ。り。し。と。も
 衣。掛。り。し。申。入。り。ハ。舞。子。は。真。加。り。ぬ。と。も
 といふ。し。ら。り。大。字。の。尊。像。は。あ。ら。ふ

いづるに南薰操一曲を彈奏するに
數千年來此古樂器開元乃遺響
弦上よ備に難者きいそあふり

昔思秋風如法詠越々けり七の緒ふ
御音とと一富乃小川に松の歌

又

異國乃ちあふ海を掛るはらかき
字の南都うと次ははる入る

又

世々婦事し七の緒ととのき
とみ乃小川に松の歌

又

幾載傳聞抱賞心即今親奏開元琴南風和得洋哉
意實是先王太雅音

